

# Goshin Moro

## Supporters Club News Letter

# 09

茂呂剛伸後援会 会報

2020/03



# 縄文太鼓と共に、 3年目のパリへ

～一万年の悠久の響き、縄文文化の魅力とは～  
2019.11.15・16 パリ国際大学都市日本館



2019年で3年連続となったパリ公演。今回は初の2日間にわたるステージを実現することができました。

フランスにもますます増加している縄文ファンの方々に多彩な縄文文化をより知って楽しんでいただけるよう「講演+ライブ」という二本柱のプログラムを行いました。講演では写真と映像も交えて、2021年に「世界文化遺産」登録を目指す北海道・北東北に広がる縄文遺跡群とその文化をご紹介します。ライブでは茂呂をはじめ、澤口勝さん、川村怜子さん、井尻哲男さんの4名の「縄文太鼓隊」と、長きにわたりピアノで共にステージを作っていただいている福田ハジメさんが全身で音と響きを作り出し、迫力あふれるパフォーマンスに皆さまから大きな拍手をいただくと共に、実際に縄文太鼓にも触れていただきました。

時代を、そして大陸を超えてつながる文化と音楽の旅のご縁を今年も続け、そしてさらに広げてまいります。



## 錦秋の羊蹄の麓に縄文の風は吹く JOMON+ART village in Niseko 2019

2019.11.4 ニセコ中央倉庫群 (北海道ニセコ町)

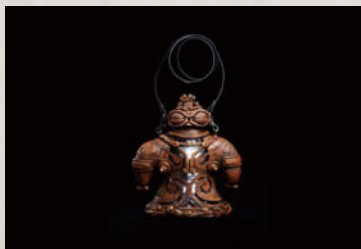


北海道・ニセコ。

この地にアートとカルチャーの新たなステージを作ろうと、たくさんの皆さまのご協力を得てイベントを立ち上げました。

「縄文」をキーワードに枠組みをつくり、これにまつわる様々な表現の場を作り出そうとするプロジェクトとして、2017年に初演された舞台『盲目のサロルンカムイ』の再演、縄文文化に熱く迫るドキュメンタリー映画『縄文にハマる人々』の上映、縄文ファンとしても名高い片桐仁さんをお迎えしてのワークショップ、写真作家のウリュウウキさんの作品展など多彩なプログラムを展開しました。地元のみならず札幌からのバスツアーも満席となりました。間口の広く奥の深い縄文文化を、思いを同じくする人々ともっと共有していくために、私たちのチャレンジは続きます。

このイベントの様様を『縄文にハマる人々』の山岡信貴監督が撮影してくださいました。茂呂のウェブサイトでご覧いただけますので、ぜひご覧ください！



## ここ 地域から 豊かな 文化を 発信する

司会・撮影・構成 ウリュウ ユウキ

### 好奇心と想像力、 そしてヒューマニズム

・・・中村さんは「縄文サイエンス&アート」というNPO法人の理事長をされておられますが、縄文とサイエンスとアート、一見全く別のものでありそうなことに実は関係があるとお伺いしております。縄文人は日本人のものの考え方、価値観のルーツであると縄文を愛する皆さんがおっしゃいますが、そんな中でサイエンスとアートという視点は新鮮な切り口ですね。

**中村和男さん** 昔の教科書では「縄文」と「弥生」の区分は切られていて、日本文化というものは弥生時代からできたという話だったのが、昭和40年代前後に土地開発や高速道路の建設をやったら縄文遺跡がゴロゴロ出てきて、そこから縄文の夢が開いたわけです。

縄文と弥生と言ってスパッと分けちゃうけども、その後サイエンスとテクノロジーが急速に発展してきて、その中で縄文の位置付け、縄文と弥生は混じり合って形成されてきたことがわかってきたのです。真実に近づくことはサイエンスの面からも絶対に欠かせない作業です。これがNPOを作ったきっかけです。

そしてアートの側面で見ると、縄文ののびのびとしたところとか力強さ、この部分がおそらく茂呂さんや皆さんの興味を駆り立てていると思います。アートの観点とサイエンスがきちっと縄文文化を評価した時に初めて人間の普遍性に迫れるんだと思います。縄文というものが素晴らしいものであったら世界が認め飛びつくだろう……という発想を持っていたのですが、案の定

飛びついたわけです。縄文への"想い"がたくさんありすぎてしまう中で、改めて一回きちっと整理しておかないという気持ちでいます。特に遺伝子解析のアプローチは目覚ましいものがあります。三つ目に大事なことは、ものすごく大事なことなのですが、縄文って誰でも語れるじゃないですか、夢物語でいいんですよ。それが縄文の楽しさです。

・・・縄文に携わる私のこれまでにお目にかかせていただいた方、皆さんがそうおっしゃいます。

**中村** サイエンスはある意味でしっかりしたエビデンス(知見)を持っているから必要以上にミスリードしてはいけないという部分があって、だから従来の考古学では考え方を分類したり類似性を見ていったりしたけれど、サイエンスはそれ以上に独自性を見つけていくわけです。最新のサイエンス(遺伝子解析など)とアートと夢の部分、この夢の部分が生きた縄文じゃないですか。夢を誰でも語って認識することによってみんなやっていくのが大事ということです。縄文ってどこにでもあるんですよ。九州にも近畿にも北海道・東北にも、山梨の八ヶ岳にもある。流通や情報交換、そういったものを含めて日本の文化の原点と捉えて世界遺産にしたらいいと思います。遺構として残ったものと、文化的な側面、現代に生きるエネルギーや知恵、この部分を出していきたい。これができたら素晴らしいじゃないですか。この部分を含めてみんなで連携していこう、それぞれの地域によって出方は違っても同じ思いで全体の中で考えよう、と。そして、地域に属した考え・生き方・生活の仕方があるのは気象条件や自然環境が違うからです。南と北で違うのに

同じってありえないじゃないですか、そうしたこともわかりながらやっていくことも使命としています。そこに僕も茂呂さんも時間がある限り駆けつけて活動しようというのが大事だと思っています。

**茂呂剛伸** 持続可能な社会を私たちが求める中で、その普遍性の中に縄文というテーマを国内で、そして海外でも提示することが大事だと思います。

**中村** 縄文アートって、アフリカン・アートに非常に近いものがある。それはプリミティブ(根源的)だからだと思います。人間が進化していく中で、手が自由になって、それと同時に脳が発展し獲物を採取できるようになって、そして服を着たわけです。チンパンジーは着なかった。服を人間が着ることによって寒いところにも移動が可能になったのは餌だけでなく好奇心からだと思います。餌だけで動くならそこだけでも十分食べていけたわけです。でもあの向こうに行ったら何があるんだろう、という好奇心。好奇心と想像力はまさにアートなんです。ここで大事なことは、動物によっては寒いところにしかいられなかったり、その逆だったりするものが、人間は服を着ることによって自然に対してちょっと抵抗できるようになりました。ちょっと抵抗できる部分と、抵抗しすぎちゃって破壊する部分の中で縄文の人々はちゃんと調和をつけていた。殺戮したという歴史がないから、多分非常に平和で、災害が当たり前のようになってもみんなで集団で生き延びられる知恵があって、まさにダイバーシティで、そこにみんなが夢を感じる。階級も無かったわけだしね。

**茂呂** 風土という言葉がありますが、地形や気象、いろいろなものが食べものや着る

もの、土器やデザインにも影響したと思います。

**中村** それアート的好奇心と創造性、そして機能性にもつながると思います。

**茂呂** 縄文文化は各地域に交流が行われていて、ある地域で作られていた土器が別の地域で出土していたりもします。お互いの風土や違いを認め合う多様性への理解があったわけで、戦わないということはものすごく大変な決断だと思います。戦ったり殺めたりは簡単な選択肢ですが、それを選ばず争わないための知恵があったと感じています。

**中村** 群れをなしていたことは間違いないわけで、その人達が基本的には自分たちのコミュニティの中で生きていこうと動いていて、でも思う以上に人間の好奇心というのはいろいろなところ、とんでもないところに行く。行けば行くほど想像力ができる。寒いところに行ったら全然違った経験をする。今度は暑いところに行ったらどうなるだろう、って。そして恐怖心もあって、真っ暗闇の世界で怖いはずなのに好奇心と想像力はそれを超えていく。赤ちゃんを見るとよくわかりますよね、動物の赤ちゃんもだけど怖がらない。どこでも行っちゃう。人間の原点というものを縄文からは学ぶことができるのです。

**茂呂** 縄文の土器土偶のデザインってどこから想像されたのか、ひょっとしたら宇宙人説までもがあるくらいの創造性、そこへの好奇心ですね。

**中村** そのとんでもない好奇心を今の人間は忘れてるのです。文明社会はテクノロジーで与えられて選択するだけ。だから好奇心、想像力、もっと言えばヒューマニズムが大事なのに忘れ去られてきています。環境がおかしくなって、本来ならここを捨てていいところに移動する時期が来たと思うのかもしれない。だけど地球規模で変わってきているから、どこに行っても大規模な災害が起こり出している。だから宇宙に目がいく。でもヒューマニズム、生命力というのをもう一度スイッチオンして考えると、違う知恵が出てきます。それが縄文から受け取るべきメッセージだと思えます。

**茂呂** 創造性や博愛は情報が入ってきたから発動するんじゃなくて、縄文人たちはそれをすでに持ち合わせていたんですよ。何かあるから動くんじゃなくて、持っているよ。

**中村** それ人間の素晴らしさです。それを信じているんです。だけど人間の宿命的な問題は、殺しあってしまう。そういうことに痛みを感じなくなってしまった。自分が直接手を下さなくなって、無人飛行機で殺

害もできる。核や原子力の問題もそうですよね。どんどん鈍感になってきた。でも気がつき始めて、これはおかしいぞとスイッチオンされた時に、「今なぜ縄文か」ということが分かる気がします。この感性が一番共鳴しているのが若い人たちだと思いますし、必ずしも大企業に入って最先端のことだけやるのではなく、もうちょっと自由なのびのびとやって、そんなにお金は要らなくともと思う人がたくさん出てきているわけです。心と心の大事さ、「人間とは」というところから入っていくことを切り口にしていけないと、変な方向に行ってしまう。縄文から武士文化になると派閥を作ってヒエラルキーができて、権力がでてきちゃって。でも縄文では絶対の調和がとれていたのです。



## 「手」でつくる、考える、扉を開く

**茂呂** 手でものを作っていくと、自分の内観ができて、手を使うことによって、目から入ってきて脳のデータベースとくっつく。手ってめちゃくちゃ微妙で繊細で。それで脳とリンクしているから、どんどん脳が発達するんです。

**中村** 例えば日本の教育では、ピカソの絵はこうだ、モネ、シャガールはこうだっていうだけで点数を付けるけれども、そうではなくていろいろな絵を描いていて、その代表作がこれだよという教え方をしなければいけない。だから、アートの教育は”この粘土をあげるからあなたやってみてね”という話なんだよ、そうしてやってみたらわかるよと。下手であろうが手でもものを作ることがアートだと思います。今アメリカで箸を使った教育が出てきています。ナイフとフォークじゃなくて箸でどう食べるか、これが脳にいいんです。最後のひとかけらまでどう食べるのか。あれがあるからちっちゃなものまでつかめる。そうじゃなきゃ、切ったものをがばっ、ですよ。そこに繊細な文化がある。縄文を考える時に「手」はものすごく大事です。縄文太鼓が手の微妙さで叩くというのはまさに縄文を理解することに合っている。

**茂呂** 私たちの活動が、ただ演奏を聴い

ていただくだけでなく、作る、叩くことによって縄文への扉を開き、好きな縄文のジャンルへの入り口になればというのは、そういうことです。

**中村** それ茂呂さんたちが切り開いたいちばん素晴らしいところです。縄文時代の土を使い、同じように焼き、太鼓を作って、そこだけでもワクワクします。好奇心とか、さっき言ったことが全部入っている。

**茂呂** ふるさとの土で縄文太鼓を作るといっても、土の記憶、故郷への思いを馳せるための装置です。この先には夢があって、フランスの土で縄文太鼓ができればと思います。エゾシカならぬジビエの皮で。

**中村** プリミティブなところを押さえた上で、縄文そのものはフランスにないから、茂呂さんのやっている縄文太鼓をみんな世界に広げて、みんなで平和を考えようというのはあり得る話だね。最初は茂呂さんもそこまで考えていなかったと思うけど、やっているうちにやっぱり茂呂さん自身が揺り動かされてやっているこの活動は素晴らしい話ですよ。

## 自然の中にアートを解放すること

**茂呂** 「中村キース・ヘリング美術館」を故郷の山梨にて2007年から運営されていますが、東京でなく山梨に開こうとされた思いは、どこにあったのでしょうか。

**中村** キース・ヘリングは、どこでも描いちゃった人で、アートを一部だけでなくすべての人に解放しようとした人です。アートは初めは好きに描いていたものがコレクターやスポンサーのために描き始めて……となっていった中で、彼は大衆と一緒に壁や地下鉄に描いていったわけです。ニューヨークに行ってみるとわかりますが、自然がないようで「自然」がある。ある街角を入るとアフリカのようなだったり、セントラルパークもあるし、廃墟もある。そのアートシーンが「自然との折り合い」だなと思っていたのです。それをそのまま東京に持って行って「キース・ヘリングです」と言うのと、大自然の佇まいの中で見ると、どちらが彼の想いが強く伝わるかと考えたのです。

**茂呂** 伝えたいのはビジネスの中のアートシーンとしてのトッププレイヤーではなく、作品が持っている力そのものをどこで見てもらいたいかということですね。

**中村** 自然の中で描くのが一番いい。むしろ東京が一番描きにくいんじゃないだろうか。そういう中で、八ヶ岳は縄文銀座とまで言われるエリアであり、温泉も湧くエネルギーがあり、もしかしたら縄文人もそこ

に畏敬の念を持っていたのではないかと思います。プリミティブさが縄文に非常に似ている彼の作品を、美術館に押し込むだけではなく、建物も「縄文」でなければというイメージで作ったわけです。

茂呂 山梨に伺うと大地のエネルギーを感じますし、安心して住める場所という感覚になりますし、風、日差し、豊かな大地を肌で感じます。

中村 北海道もそうだけど、人間はスイッチオンするとどこかで自分が解放されてクリエイティブになれる場所かわかるようになるんです。テクノロジーが発達してどこにいても働ける時代になって、ひとつのところにこだわるんじゃなくて、それこそ好奇心で我々も移動していろいろなところで活動できるわけです。そういう意味で我々自身も、アートも解放していなければならぬんです。銀座の画廊の中に入っちゃ縄文土器もさみしそうじゃないですか。精神性を見せるにはそこじゃないと。

茂呂 アートにはパワーが含まれているとおっしゃっていましたが、それは数値化できない感情の部分じゃないですか。それは共通言語として本来は目に見えたものだと思っただけです。それが鈍感になって見えなくなると。

中村 小学校などで先生は絵をきれいに描かないと点数をくれないけど、キースやバスキアを見ると「こんなのでもいいの？」って(笑)。それこそが個性で、縄文だってそうで、見たままのシンプルさですごいなあって想像力、本来の感性で受け止める力、そういったものを都会に押し込めるんじゃなくて解放してあげる。茂呂さんたちも、ホールなどで演じるのもいいんだけど、外でやるのが気持ちいいでしょう。同じことだよ。

茂呂 「中村キース・ヘリング美術館」があることによって地域の人たちの交流が生まれ、子どもたちの絵画展「国際児童絵画コンクール」も開催されていますね。

中村 国際的な作品が集まり、また地元の方々も作品を出してくれて10年を迎えますが、今の日本の子どもの作品は画一的すぎて、おおらかなものが少なくなっています。でもその中からすごい作品が出てくれることを願っていますし、この度ニセコ町と蘭越町も後援してくれて、ここ(ニセコ)にも作品を巡回展示できることになりました。ただ残念なのは、こうした活動に資金を支援してくれることが日本ではまだまだ少ないですし、継続できる支援の仕組みづくりをしないと次につながらない。

茂呂 私も文化活動の会社を作って7年目になりました。演奏や製作指導など皆さんから頂いた報酬から作品を作っていた

り、弟子たちの育成や海外公演に行っ、ひとステージひとステージが「また呼びたい」につながっていくようにいい意味での自分へのプレッシャーをかけてきました。ここからは地域との連携、次の世代に伝えていく環境づくりの枠組として、財団法人を作れないかと検討しています。ここをベースにして、応援をしていただきやすい環境を作っていくことも、文化を支えていく為に必要な事だと思ひ、準備を始めています。

中村 私たちもNPO法人として「縄文サイエンス&アート」を有志で作っていますが、次の世代に継続していくために活動をマネタイズする事は必要なので、茂呂さんたちとも知恵を絞らねばならないと思ひます。



## 発信したいのは「時のビンテージ」

茂呂 これからの使命として、北海道、そしてニセコもこれだけ海外との交流が活発になる中で、いち地方都市としての考え方ではなく日本全体としての縄文文化の発信をここからしていき、エンタテインメント、アートとして形にしていきたいと思ひを持っています。

中村 大賛成です。みんなと同じことをやってもしょうがないですし、茂呂さんが切り開いた「縄文太鼓」を世界に持って行ってくれたらいいと思ひます。僕らのサイエンス&アートも各地の人々と一緒にやる必要があります。その意味においても期待しています。僕も「JOMON + ART village」という中でいい感性を形にしていけたらと思ひます。

茂呂 中村さんに会長をお引き受けいただいた「JOMON+ART village in Niseko」にエネルギーを持った人たちが集まって何が生まれるか、ワクワクしています。

中村 ニセコや蘭越の町長さんたちは素晴らしい行動力と発信力があって、いろいろな情報を内外に向けて発信しています。そこにアクセスしてくる人たちもまた面白いのがいいですよ。

・・・世界に発信すると、世界からも情報が入ってきます。どこからでも世界に発信できるような世の中に、今どんどんって

います。ニセコエリアの皆さんはいち早くそれに気づき、具現化し、生活の中で実感しながら生きておられます。

中村 ニセコ町も外部の人を積極的に採用しています。いろいろな人々が入り出してエネルギーを感じます。そこに僕たちが縄文文化で何かできないかと言ったらいち早く乗ってくれました。

茂呂 2030年頃に新幹線ができれば、倶知安と札幌が15分で結ばれます。またガラッと変わってくるでしょう。

・・・さらに今後高速道路もつながっていくわけで、札幌もうかうかしてられないです。

中村 これからの文化というのは自然を取り入れながら創るという段階にきていると思ひます。

茂呂 キースの作品を銀座でなく山梨で見せたいと思われたように、私も縄文の響きを羊蹄山の麓で聴いていただきたい、打ちたいという気持ちは同じようなものを感じます。

中村 これからの日本の子どもたちに、アートとサイエンス、そしてヒューマニズムをきちんと教えることができるようになれば、すぐユニークな人材が出てくるでしょう。今までは何点取ったかという評価を与えていたけれど、これからは創造性とヒューマニズムが大事です。振り返ると日本には歴史があって、例えばその歴史のある京都は、「時」がビンテージになっている。他のところは時が減価償却になってしまう。僕らがやろうとしているのは「時がビンテージになる」ということなんです。縄文ってそういうことです。伝統を守りながら変化に対応させていったから生き残っている。

・・・老舗が常に新しいように、ですね。

中村 精神性をちゃんと持っているからぶれていない。縄文もそうで、縄文文化を使ってコンテンツにしていく。

茂呂 縄文で楽しむ、遊ぶということを未来への希望にしていきたいと思ひます。

中村 何々したいから、ということを行動に変える。誰しもどんな人もいいものを持っているから出してごらん、上手い下手じゃなくて、それでいいんだよ、そこだよ。

(2019/7/27

キースプリングニセコ(蘭越町)にて)

# 2年連続!! 縄文太鼓で渋谷を熱狂の渦に!

## YATSUI FESTIVAL 2019

2019.6.16 O-EAST (東京都渋谷区) 撮影: yakou.ai



お笑いコンビ「エレキコミック」のメンバーにして大の音楽好きであるやついいちろうさんが主催し、294組が登場した7回目のライブフェスティバルに2年連続の出演を果たしました。ロック・アイドル・DJからお笑い・トーク…ジャンルやスタイル、ジェネレーションを超えたライブが2日間展開される中、茂呂率いる縄文太鼓隊が再び渋谷を熱狂の渦に巻き込みました。音のあるところに飛び込み、音で踊り楽しむことを共有できることは、私たちの何よりの喜びです。



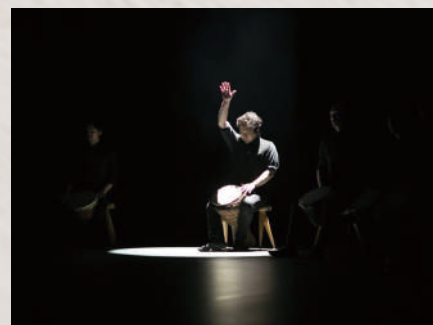
## 表現の根源へ、 まだ見ぬ景色へ

### PRIMITIVE

2019.2.11

札幌文化芸術劇場 hitaru (札幌市中央区)

上段2点撮影: モリシマ ユイ



2018年秋に札幌最大の劇場として開館した [hitaru] のオープニングシリーズとして、総勢200名が作り上げる舞台に出演しました。最新の音響や映像技術をふんだんに用いた舞台機構と、身体から生まれる表現。その全てに「人」が関わり、本作のキーワードである「根源」に迫っていきました。見たこともないような、でも誰もが持っているものを表現し形にする、エキサイティングな体験をさせていただきました。

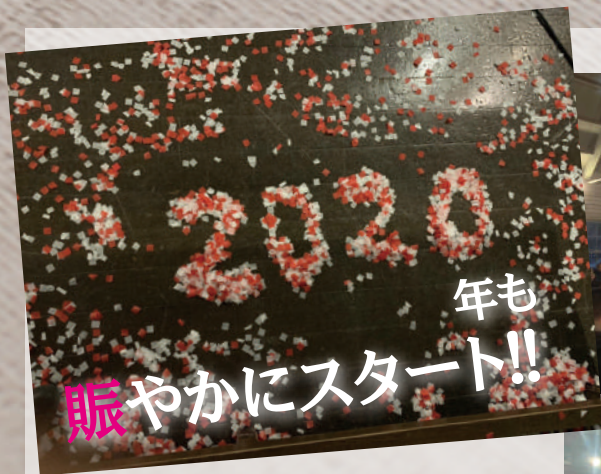


# 五感が交差する [North JOMON Session]

2019.8.25  
札幌芸術の森 野外ステージ  
(札幌市南区)



札幌の夏を彩る「SAPPORO CITY JAZZ」のメインイベントの一つ「North JAM Session」。このステージに、グラミー賞アーティストでアレンジャー/ピアニストのデビッド・マシューズさん率いる「札幌ジャズアンビシャス」とともに立たせていただきました。当日は雨上がりの晴天に恵まれ、これまでも多彩なジャンルのミュージシャンと共演してきたプレイヤーとのセッションに茂呂のステージでもおなじみの福田ハジメさん、鈴木明倫さん、そして7月に開催した「縄文太鼓でアートキャンプ」に参加された皆さんも加わって、五感で楽しむ「北の縄文セッション」を満場のお客さまにお楽しみいただきました。



札幌市時計台  
ジルベスターコンサート  
2019 2019.12.31-2020.1.1  
時計台ホール (札幌市中央区)



2019年も「ライブ納め」と「ライブ始め」は札幌のシンボル・時計台で！恒例となったジルベスターコンサートをプロデュースしました。鈴木明倫さんのダンス、菅野優斗さんの津軽三味線、山木将平さんのギターとともに茂呂も縄文太鼓で華やかに盛り上げる中、今年も市内外、国内外からの満員のお客さまと一緒に時計台の鐘で新年を迎え、花吹雪舞う中でクライマックスを迎えました。幅広い舞台上で音楽・文化活動が出来るのも、日頃から応援いただく皆さまのおかげです。今年も表現を通じて世界中の方々にお目にかかり、そして喜んで頂けるよう、門下メンバー一同、さらなる研鑽を続けてまいります。

## 「一般財団法人 縄文芸術文化財団」を設立しました －「縄文」のさらなる発信を通じ、地域と芸術文化の発展に貢献を続けます－

私共は「縄文太鼓」を核に、縄文文化のさらなる発信を目指し、予てから財団法人の設立に向けた準備を行ってまいりましたが、2019年10月1日、「一般財団法人 縄文芸術文化財団」の設立認証をいただき、登記いたしました。これまで「株式会社オフィスモロ」と「茂呂剛伸後援会」が行ってきた活動を本年より財団に移行・統合し、縄文太鼓の制作・演奏・指導に関する一切の活動や門下メンバーのマネジメントを行うとともに、長きにわたり培ってまいりました人的・地域間のつながりをより強め、全国、世界に発信し得る芸術文化としての『縄文』への共感の環を広げてまいります。

今後も活動の幅をさらに広げ、公益財団法人への移行も視野に、縄文文化の発信と高揚に一同邁進してまいります。

皆さまの変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしく願い申し上げます。



## 縄文芸術文化財団

財団のロゴマークは、北海道を代表するデザインユニット「ワビサビ」が手がけてくださいました。

土器のフォルムで頭文字「J」を形作り、縄文芸術の広がりを表現しています。私共の新しいシンボル、どうぞよろしく願いいたします！

## 2020年度 第1回財団総会について

毎年春に開催してまいりました後援会総会を引き継ぎ、新発足した当財団の第1回総会の開催につきましては、昨今の社会状況を鑑み、日時及び形態を慎重に検討しております。

詳細が決定いたしましたら財団のウェブサイトにてお知らせいたします。今しばらくお待ちいただき、開催の際には皆さまのご参加を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 編集後記

今年度は会報のお届けを大変お待たせすることとなり、申し訳ございませんでした。

2019年はこれまでの私共の活動の歴史の中で最も多くの舞台に立たせていただくことができました。想像もしなかったような、でも、想い続けてきたさまざまなステージとフィールドで「縄文太鼓」を発信できたことは、茂呂のみならず門下メンバーや携わるすべての人々の喜びです。

新しく旗を掲げた財団をベースに、愛してやまない『縄文』をさらに芸術文化として高めていく私共のチャレンジは続きます。

後援会報としてお届けしてまいりました本誌も、次号より財団のニュースレターとして号数を引き継ぎつつリニューアルするほか、4月に開設予定の財団のウェブサイトとも連動し、より充実した情報発信を目指してまいります。引き続きのご愛読のほど、よろしくお願い申し上げます。

\*バックナンバー(vol.01～08)ならびに英語版(vol.01～03抜粋)・フランス語版(vol.01・03合併号/vol.02)をご希望の方は、事務局までお問い合わせください

## 茂呂剛伸後援会 財団内への移行のご案内

縄文の響きを未来へ…そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう2015年4月に発足した「茂呂剛伸後援会」は、この度の一般財団法人化に伴い、財団内に移行した上で新たなご支援のかたちを企画中です。

現在新規のご入会は一時お休みさせていただいておりますが、新たな要項が決まりましたら、ウェブサイトなどにてご案内申し上げます。今しばらくお待ちいただき、そしてご期待をいただければ幸いです。

【お問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール [info@jomonart.or.jp](mailto:info@jomonart.or.jp)